

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑記帳 : 隨筆
Author(s)	吉田, 隆喜
Citation	龍南, 241: 1 - 8
Issue date	1938-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7478
Right	

|| 雜 記 帳 ||

吉 田 隆 喜

中學時代、校内の辯論大會を聞いて、自分も一度位演壇の上から多數の人々に呼びかけて見たいと思つた事だつた。五高に入つてからも、寮の辯論大會の開催される毎に、出て見ようかなと思つた事もあつたが、唯決心にのみ終つて了つた。そしてこんな事には自分は全然適しないと諦めて了つた。

未だ小學校の頃、學藝會で二回程讀本の朗讀をした事がある。自分の番が近づく頃になると、心臓がどきどきし、落着かうといくら努力しても駄目だつた。いざ讀み始めると、初めの中は顔のほてり、ぶる／＼足の振へるのが感じられたが、暫く経つとそんな意識もなくなつて、もう無我無中で讀み通し、禮をしたのかどうかも覺えず壇を降り、その後暫くは頭が／＼して居たのをよく記憶して居る。

話すにしても、書くにしても、そこに自分の考へが現れ、他人に知られるのが、何か怖くさへ思はれるのである。余りに小心翼翼だと非難されるかもしれないが仕方がない。「隨筆か論文か何か書いてくれ。」と頼まれて、この様な僕が非常に狼狽した事は皆さんも想像出来るであらう。然し演壇に立つた時よりは易い様に思へるので、此所に此の一文を草したわけである。

所謂隨筆と言ふのには當らない様な氣がする。時日も切迫してからの事とて、慌てゝ日記の中から拾ひ出し、自分と

しては最高の文筆を振つたつもりで出来上つたのが、此の纏りの無い断片である。フ、ンと笑つて戴き、それに自分がどれ程の太刀打ち出来るかが解つたら嬉しいのである。

○

「自分とは何か?——」一つ卵子和甲の精子との結合によつて生じたのが此の自分である。そして一の卵子和乙の精子とが結合して居たら、此の自分とは異つた他の自分が生れて居た事であらう。

「然らば此の自分が此の自分を此の自分として意識するに至つたのは何故か?」——之は生きて行く爲には不必要な、否寧ろ妨害となる提題と言はれるだらう。

此の間は解決出来ぬもの——従つて解決の要なきもの——であつても、自己意識が人間の特性の一であり、之の出現が即ち自然史上に於ける劃期的事件であつた事には變り無い。

自己に都合良く凡ゆるものの解釋をするのが、萬物の靈長たる人間の天性なのであらう。

日常用ひられて居る「我が身」「我が親」「我が家」「我が國」等々の言葉は、皆此の自分を根柢として居るものと思はれる。「我が」の觀念は、特に我々日本人の間では強い様である。そこに長所も有れば短所も産れる。然して現代の世界は此の「我が」の觀念の強調に傾きつゝあるとも言へる。

○

「自分の子供を最も良く知つて居るのは自分だ。」とは世の親達のよく言ふ所だが、之は單に彼等の自惚に過ぎない。そこでは、子供を知るといふ言葉が余り淺薄に解されて居はしまいか。

「子供を知る事は、當然子供達の育まれて居る社會の認識に始る。」といふ前提が許されるとすれば、世の親達、特に子供の養育、教育に直接當る女性の現状は、全く悲觀的であると言はざるを得ない。

明治初期に始つた我が國の學校教育制度は、新しい社會に活躍すべき人士の養成といふ緊急の必要に迫られて出來たものだし、それに當時は封建時代をやつと脱し得た時代でもあつたので、女性の教育は輕視され、蔑視されさへし、今日迄も此の遺風がその儘存して居る。かうした譯で、女學校を出ても、直に所謂花嫁修業をやらせられるか、又は職業婦人となり、間もなく結婚するといふのが多くの女性の進路である。之では現代の日本女性に社會認識を注文する方が無理である。女性に思想する機會が殆ど與へられて居ない。こゝに女性と男性との間の知性の隔りが生じ、結局は女性と男性と平等の人間的存在であり得ないと言ふ結果になる。戀愛に於ては、ロバート・テイラーを標準として外面的な相手の觀察は出來たにしても、より重要なその内容の觀察は爲し得ないし、結婚生活に於ても、配偶者が彼女の再教育に努力してくれる親切と餘暇を持たない限り、單なる夫婦生活以上のものを望み得ないと言つた風でどうして良からうか。それに、「一生懸命勉強して立身出世しなければなりませんよ。」と鼓舞激勵すれば、母の務めが濟んだのは遠い以前の事だ。さうした激勵は、現代の子供達には、うるさい掛聲に過ぎなくなつて了つて居るし、又その様な鼓舞に飽いた子供達は、母達に哀愁の眼を、時には侮蔑の眼をさへ投與へないとも限らない。此の點から特に、現代の母はより一層の自覺を請求せられて居るのである。

女性の犠牲的精神の全面的放棄に双手を擧げて賛成するわけではないが、阿蘭的存在としての良妻賢母では困るし、それかと言つて、外面のみの近代化した女性の、颯爽と大道闊歩するのを見るのも心細い。獨乙ではナチスになつてから、「婦人よ、家庭に歸れ!!」と盛んに叫ばれて居るが、獨乙の婦人は、充分の教育を受けて後家庭の人となるさうである。我が國でもさうありたいものだ。現代の日本女性には人間的自覺が必要だ。そしてそれには、全社會の關心事として、その全成員の充分の理解と援助とが與へられねばならない。

即ち女性が高聲に「女性の解放」を主張し、「男子何するものぞ」の氣勢を張つただけでは仕方がない。かうした態

度は社會的存在としての兩性の平等化を目指す女性解放の本旨を外れたものであるし、それに女性單獨で現在の社會的環境を變化させる事は不可能であらうから。教育の機會均等によつて、女性に思想する機會が與へられる事が、女性解放の中心たるは論を俟たない。心ある男性との提携によつてのみ、此の事は成就するであらうが、その時多くの人間としての女性^{いゝいゝ}が現れ、GIVE・AND・TAKEの完全な關係が兩性の間に行はれるに至るであらう。

思想の貧困は當然現代の高校生活にも向けられねばならぬ

學生論の流行した際「キング學生」の名を頂戴した學生は、近頃、著名な或文化批評家に、「學生の就職狀況を見るに、官廳より實業界への進出の多いのは、現代學生が官僚崇拜の古い考へを捨てた結果にもよるであらう。」といふ意味の讀辭と覺しき表現を與へられても居る。之等の批評は共に淺薄の譏を免れない。一般にかうした學生論は、皮相な見解の下に、學生にむしろ悪い影響を與へて居るのではないかと考へられる。

高校に關する限り、一口に彼等は現實的だと言へる。然し決してキング學生にまで墮落しては居ない。批評的ではあるのだが、それが無爲者の批評にすぎないのである。彼等は過去のロマンチズムを笑ふ、然も新しいロマンチズムの建設を忘れて居る。そこには積極性が見出されない。之は過渡的な時代に在るものゝ、然も現實を認識する能力無きものゝ當然に陥る態度であらう。かうした際に、かうした不幸な状態に在る學生達に、新しい曙光を見出し與へるといふ、その本來の使命を遂行する力と親切に、先頃の學生論は缺けて居たと言はれる。

○

此の二年餘りに可成の映畫を見て來た。かう言へば笑ふ人があるかもしれぬが、僕は概して日本映畫の現代劇が好きである。之が時間的にも空間的にも最も自分に近いからである。洋畫を觀て居ると時々分らない所が出て來て困る。その

適例として「孔雀夫人」を挙げ得る。あの映畫の良さはアメリカの國民性をはつきり知らぬ自分には殆んど分らなかつた。僕に、涙を流して觀た映畫が二つある。「風の中の子供」と「上海」である。「風の中の子供」では、あの二人の幼い兄弟の描寫の眞實性に、此の上も無い感銘を受け、涙が出て仕方がなかつた。此の間の様に思へる自分のあの様な時代が、判然と描き出されたのが例へやうもなく嬉しかつた。あの子供の世界のほんの一部分でも、大人達が認識しやうと努めてくれたらな、と愚痴をこぼしたくもなつた。母には翌日直ぐ見に行つて貰つた。が僕の受けた感銘は理解されなかつたのが残念だつた。

「上海」、あれ程敬虔な氣持で映畫を觀た事は無かつた。帽子を脱がざるを得なかつた。ちつと畫面に見入り、一つ一つの生木の假墓標に、無限の感謝の念を捧げたい氣持で一杯だつた。然しあの映畫は決してしめつばいものではなかつた。幾多の激戰の跡や、上海の街を走る自動車から撮された支那人の顔は、無言の中に自分に強い覺悟を起してくれた。

○

確信を持ち得ぬといふ事程恐しい、そして悲惨な事はなからう。健康に於てども、思想に於てども良いが何でも確信を持ち得る人が羨しい。

弱い弱いと思ひ始めると際限がない。「いや、弱いんじゃない。弱い弱いと思ふのがいけないのだ。強くならねば。」と決心しようとする、その度に弱さが益々目立つて来る。寢床に就いてどうかすると如何にしても寢つかれない事があるものだ。何も考へまいとすればする程、色々の事が思ひ出される。かへつて何時の間にか一心に考へて居る。何も聴くまいとすればする程、何時の間にかどんな物音一つも聞逃すまいと、ちつと耳をすまして居る。遠くで鳴る時計の音に甚だしくいらだたせられる。たまらなくなつて、横になつたり俯伏してみたりするが、結局自分をどうする事も出来なくなる。こんな目に遭ふ事が時偶あるが、この例が示す様に、弱さの自覺はすんぐ自己を低下させて了ふ。自分

でこの通り自分にブレーキをかける事が出来なくなる。「どうにでもなれ。」さうした不貞腐れた態度が、却つて或強味を反射してくれるが、それも假性的な一時的なもので永續するわけはなく、知らず識らずの中に輾轉反側の過程を繰返して居るのである。

○
ゲーテのヴィルヘルムマイスターの修業時代を讀んだ。第六卷以後の方が面白かつた。何と美しいなごやかな小説なのであらう。そこに現はされた生活が創造的發展の生活と呼ばれるとは考へられない。今の自分からすれば微温的と言はざるを得ない。強い生産的なものが感じられない。かうした注文をゲーテにするのは間違つて居るとは思ふのだが。その中に現れる戀愛の場面にしても、火花を散らす様な心理の相剋は描かれず、行きつく所にすら／＼と事件が進んで行くに過ぎない。それにしても性格の異つた色々の女性に接し得る様は何か夢の様でさへある。

然しながら、當時の貴族生活を背景とした雄大なスケールは、充分文化史的な興味を惹起してくれるし、諸所に出現するゲーテの言葉は、教訓として肝に銘ぜざるを得なかつた。今その一つを左に記して置かう。

「えゝ實際あなた、私も自分の余り初心なのに氣がついて、屢々心苦しく思つて居るんです、だからあなたにでも世間に就いて色々眼を開いて頂いたらどんなに有難い事でせう、一体私は幼少時代から自分の精神の眼を外面へよりも寧ろ内面へ向け過ぎて居たのです。だから人間といふものに就ては、或程度迄は知識を持ちながら、個々の人間といふものに就ては少しも理解も會得もしないで居るといふ事は、寧ろ甚だ自然な事なんです」(第四卷、十六、アウレリーエとのヴィルヘルムの會話より)

○
彼と明治中期の中等教育を受けたに過ぎぬ両親との間には、卅年余りの時代の隔りがある。卅年と言へば普通に一世

代と言はれるのだが、彼の場合、後進國日本が世界史上稀有の發展を遂げた卅年なので、それは兩親との間に大きな溝を作つた様に思へた。

高等教育を受けさして貰つて居る、此の事を考へると、彼はどれ程の感謝を兩親に捧げて良いのか解らなかつた。兩親との溝を埋める、それには積極的に兩親に彼から働きかけねばならぬ、親を導くのが第一の自分の親孝行だと彼は思つた。

然し、大きな時代の隔りは、かうした彼の考へを無造作に破壊して了つた。何時の間にか親に――特に父親との場合に――反抗の氣勢をとつて居る自分を見付けては、「之じやいけない。」と改めて氣をとり直すのであつた。一段上の段階へ自己を上げようとする努力が、一向に効果の無いのが悲しかつた。そして自己の論理の現實に於けるはかない崩壞を見るのが口惜しかつた。

○

二階に在る僕の部屋からは、ごたごたと集つた近所の家の裏側が眺めやられる。南側には表通りに面した煙草屋の二階から物干臺が突出て居る。快いものではない。

昨年の十月頃から、此の物干臺に立てた青竿の先に、「武運長久」とか、「祈勇戰」とか、その他細々と激勵の文字の書かれた日章旗が見られる様になつた。東京の方に居られた煙草屋の息子さんが出征されたのださうで、それからは實家に歸つて來られた奥さんと子供さんが屢々見受けられた。正月前には店先に、「毛糸編物致します。」といふ貼紙がされた。

永い間には雨にも露されたその國旗は、日の丸の赤地も白地も流れた墨にどす黒くなつて了つた。雨の降る日など、ガラス窓越しに、べつとりと竿に巻付いたどす黒い旗を見ると、あの息子さんは元氣で戰つて居られるだらうか、とふ

と思つたりした。

その後風に竿が折れて、旗は見られなくなつた。子供さんの使つて居た耳馴れぬ東京辯も、何時しか土地の言葉に變つて來た。

此の間に日支事變もだん／＼大きくなつた。國內にも色々の變化があつた。そしてその波紋は自分の小さな胸にも突當つてきた。

感激感激と口にして居る中に一年は過ぎ、その言葉の空虚を感じ、幾分の讀書をしたと思ふ頃には、二年は終り、落着いて讀書も出來ずに試験に頭を悩まして送らねばならぬ三年を迎へる。

過去を顧みる時、大きな後悔の念に打たれる。「光陰矢の如し。」といふ聞古した言葉が、今更ながら事新しく感じられる。「三年になつた。」と思ふと、「來るべきいやなものがつたう／＼やつて來た。」と嘆息してしまふ。

高校生活は讀書と思索の時だとは、入學以來幾度眼にし耳にして來た事か。

讀書と思索の時を、思想する時と一語で言ひたい。「思想する。」之が高校生活の特色であり、之なしには高校生活は考へられ得ない。此の點から高校の廢止には絶対に賛成出來ない。

讀書だけでは創作にならぬ、思索がなければならぬ。讀書と思索とが相關關係の中に在る事によつて、初めてそこに創造が行はれ、進歩が起る。そして之等の所産は必ず自己の中に堆積する。我々は内容の体系化を行ふ要はないし、それは又我々の及ぶ所でもない。唯讀みそして思ひ、その過程の間に何等かの堆積が出來ればよい。心の網の目に何かしら引掛るものがあれば良い。かうした創造發展の過程を思想すると呼びたい。思想する事によつて吾々は他日現實の社會生活に當り、自分自身の中から發するものによつて現實を認識し、そして現實に突進する事が出来るであらう。